

山形・史跡山形城跡

やまがたじょう

- 1 所在地 山形市霞城町
- 2 調査期間 二〇〇四年(平16)七月～十二月
- 3 発掘機関 山形市教育委員会
- 4 調査担当者 五十嵐貴久
- 5 遺跡の種類 城郭跡
- 6 遺跡の年代 中世・近世(一六世紀～一九世紀)
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(山形)

山形城の創建は斯波兼頼によるもので、延文元年(一三五六)に遡る。斯波氏はのち地名をとり最上氏を名乗り、第一代最上義光の頃に最大五七万石の近世大名となるが、元和八年(一六二二)に改易となる。その後の山形城は譜代大名の交替地となり、水野家(五万石)で明治に至る。今回の調査地点は、本丸と二ノ丸をつなぐ大手橋地点である。大手橋は木橋で、

遺構として二一本の橋脚柱が現存している。木簡は、大手橋南側の堀内埋土より一点出土した。

8 木簡の釈文・内容

(1) ●二尺 ●一尺

990×33×8 0.61

扁平な板材で、下端部は切断面であるが、上端部は二次的な破断面を呈し、本来はさらに上方に延伸していた可能性がある。下端面から最大〇・六cmのところ細い線が引かれ、そこから三〇・三cm離れた箇所黒丸(直径約〇・五cm)が付され、その下部に「一尺」の文字がみえる。また、一尺の黒丸中心から三〇・三cm離れたところに同じく黒丸と「二尺」がみえる。一尺・二尺とも黒丸中心には、下端部と同様細線が引かれた痕跡が残る。「三尺」に相当する墨書は付されていない。樹種はヒノキ科アスナロ属(ヒバ)である。出土位置や現状から推測すると、この木簡は当初から尺棒として加工された木製品ではなく、石垣普請あるいは木橋普請などの普請現場において製作・使用された簡便な尺棒であった可能性が高い。一八世紀後半から一九世紀初頭のものと考えられる。

(五十嵐貴久)